



私だって  
恋がしたい♡♡

灰崎瑞喜の場合





はいさき みずき  
灰崎 瑞喜

- ・生まれつき声が出せない女の子。
- ・性格は明るく元気
- ・勉強は得意だが運動はイマイチ。
- ・ハンデがあるせいか、友達はあるが親しい友人は少ない。
- ・主人公は数少ない親しい友達。
- ・スマホではよく喋るしテンションが高い。
- ・主人公とは今の学校に上がる前からの友達

「ふふん(ドヤ顔)」「ふっ(鼻で笑う)」「  
「ふう……(ため息)」「へへっ(笑う)」

[で?テストの結果はどうだった?]  
[ねえ、どうだったの~?]  
[イエ~イ、私の勝ち~!!]

## 主人公

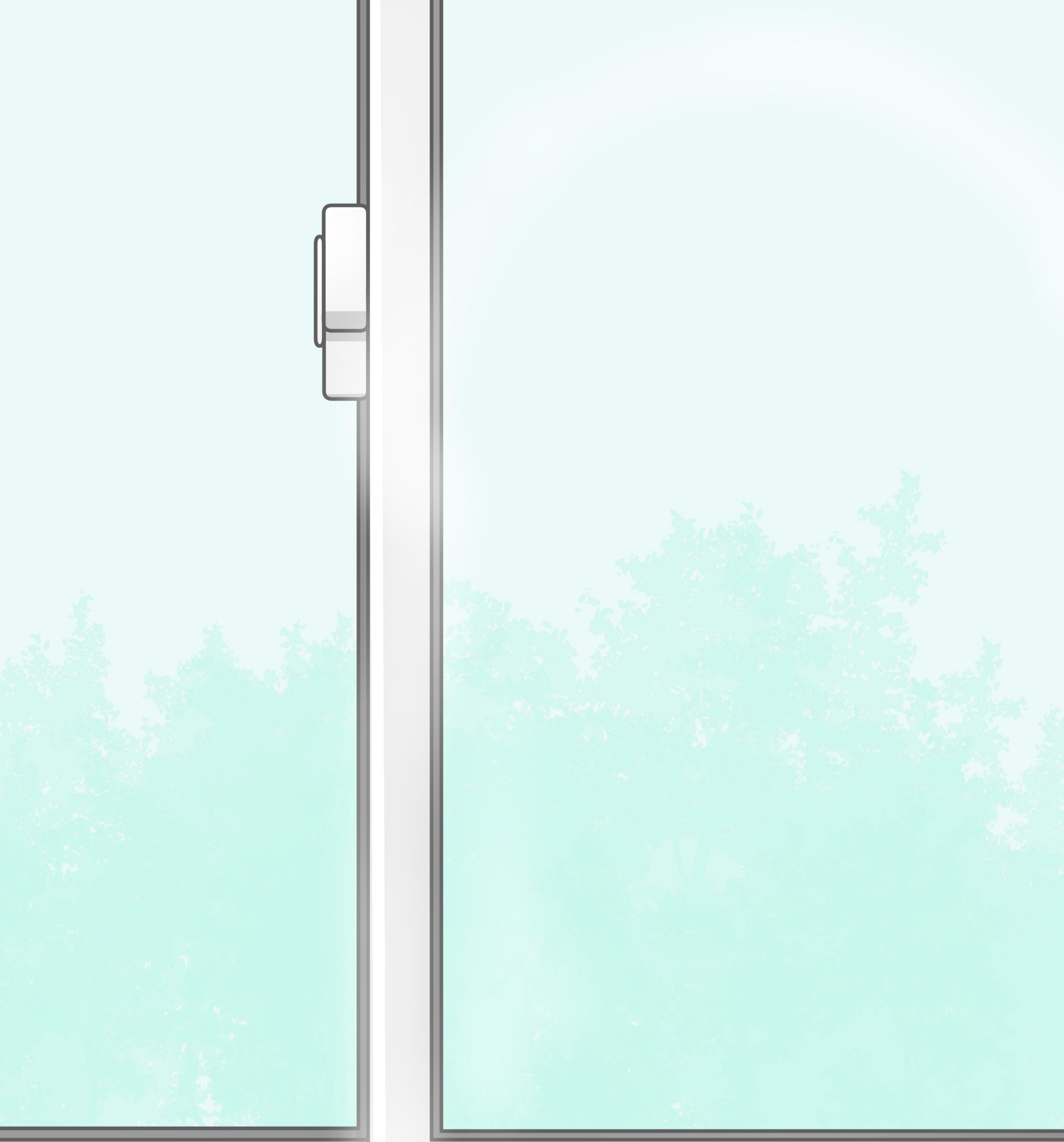
- ・勉強が苦手で灰崎に教えてもらっている。
- ・友達はそこそこいる。
- ・灰崎とは付き合いも長く面白いやつだと思っている。

恋心  
私だって  
がしたい♡♡

灰崎瑞喜の場合



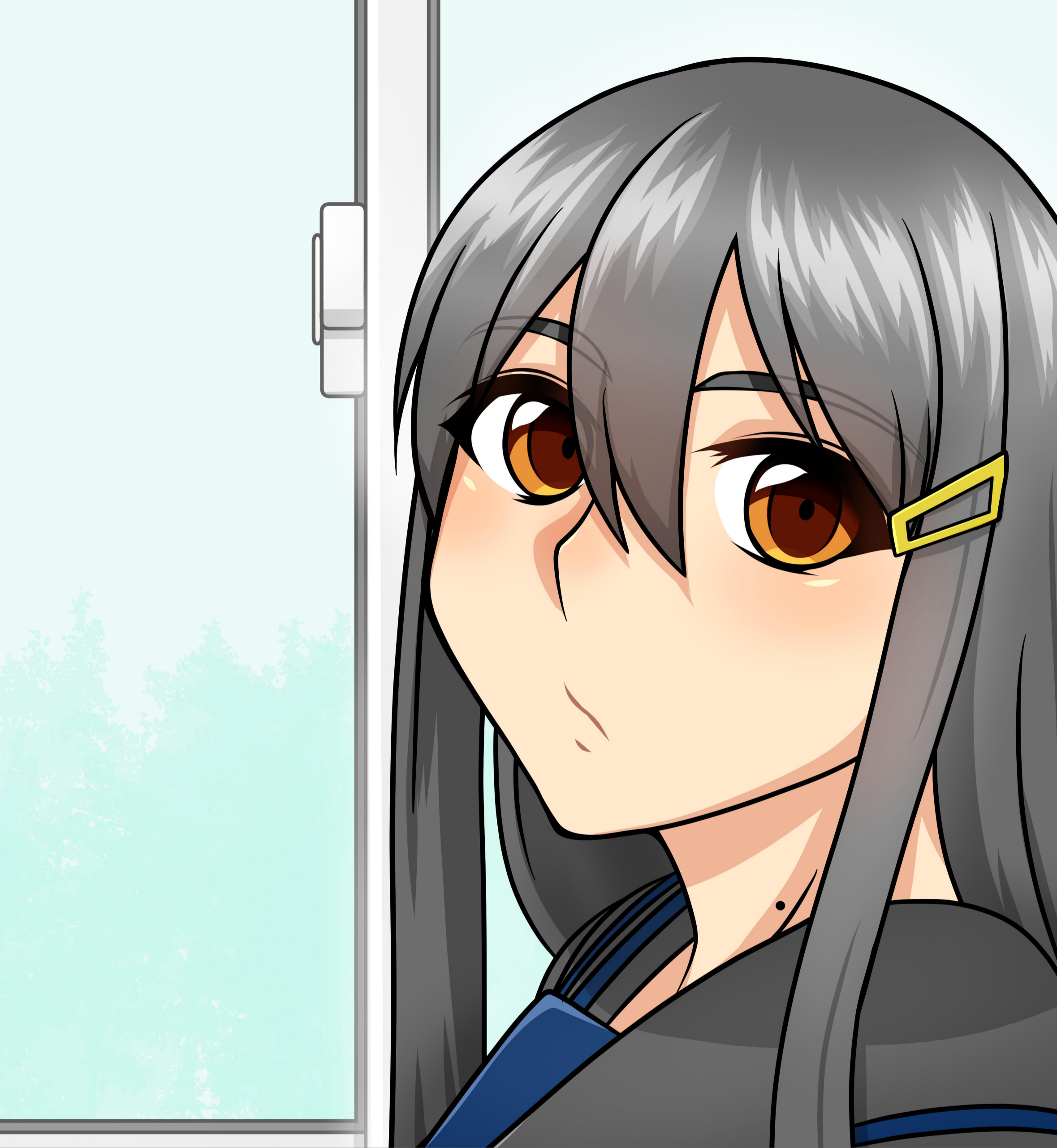
序盤サンプル



まずい。  
いや、いつもの事だしわかりきってた。

テスト、バカな俺にはきつい試験が近づいていた。  
ここはまたあいつに頼るしかないな。





「おーい灰崎、ちょっと待ってくれ。」

俺は廊下で、帰ろうとしている灰崎に声をかけた。  
灰崎は俺の呼びかけにクイッとこっちへ向いた。

「悪い、この後時間あるか？」





【どうしたの?】

灰崎は生まれつき声が出せない。  
その代わりに、身振りやメモアプリやらで会話している。

「今回もまたお願いしたいんだけど……。」



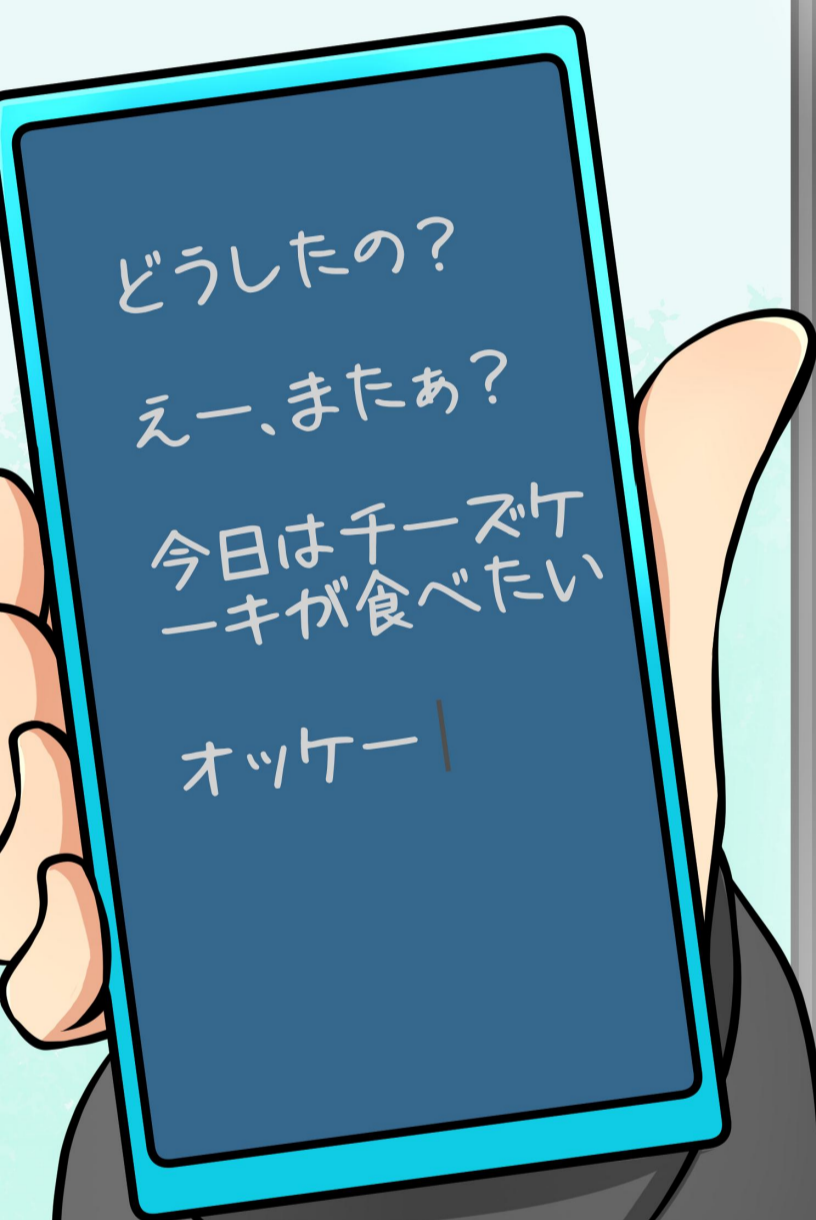


どうしたの?  
えー、またあ?

「えー、またあ？」  
「頼むよ、お前にしか頼れないんだ。」

またコイツはテスト前になって駆け込んできた。  
いつものことだから良いんだけど、もう少し普段から  
頑張ることはできないのか。





[今日はチーズケーキが食べたい]  
「奢ります奢ります。いつものところで良い?」  
[オッケー]

思わぬラッキーだ。  
まあ、勉強教えるのはいつものことだし簡単だろう。





ちなみに何が  
ダメなの？

そんな事だと  
思った

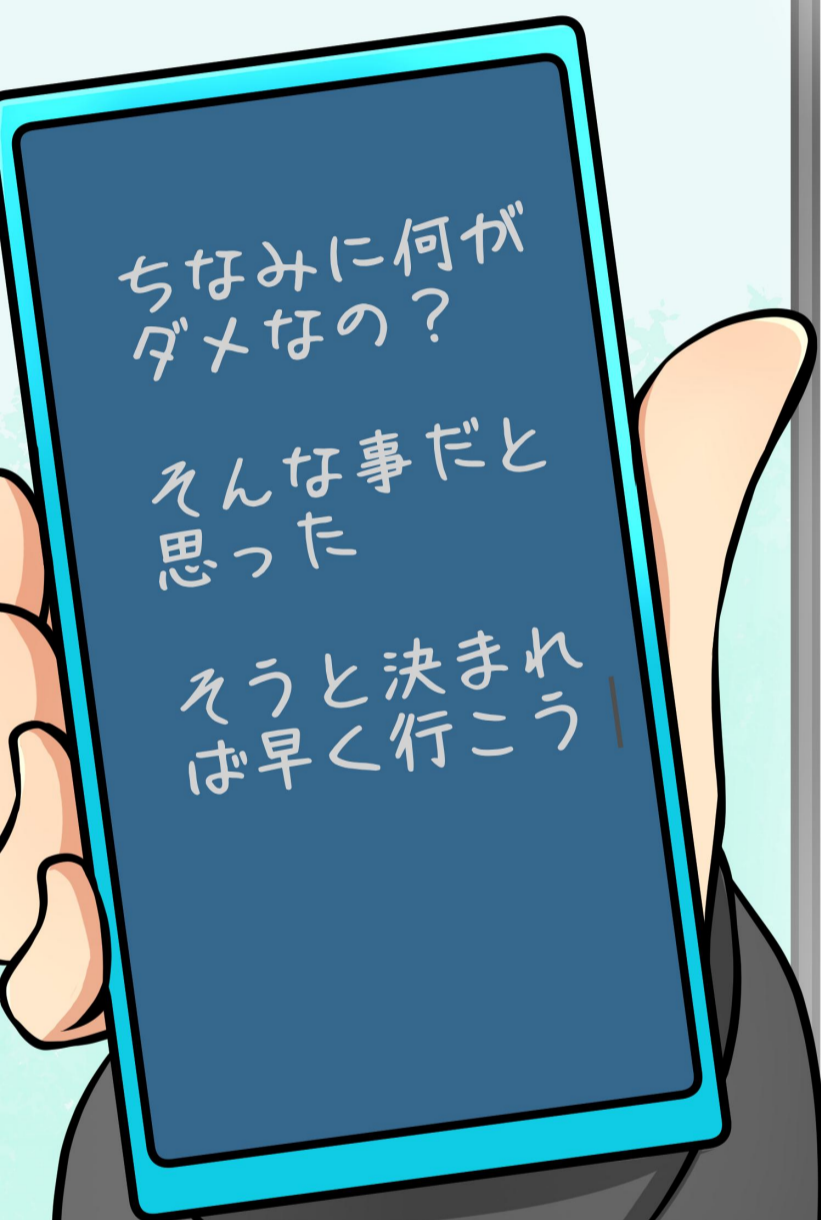
「ちなみに何がダメなの？」

「え、いつも通り何もかも。」

「そんな事だと思った」

もう完全にお見通しだ。  
毎回テストの度に勉強教えてもらって、  
勉強会一回につきケーキ一個奢っている。





ちなみに何が  
ダメなの？

そんな事だと  
思った

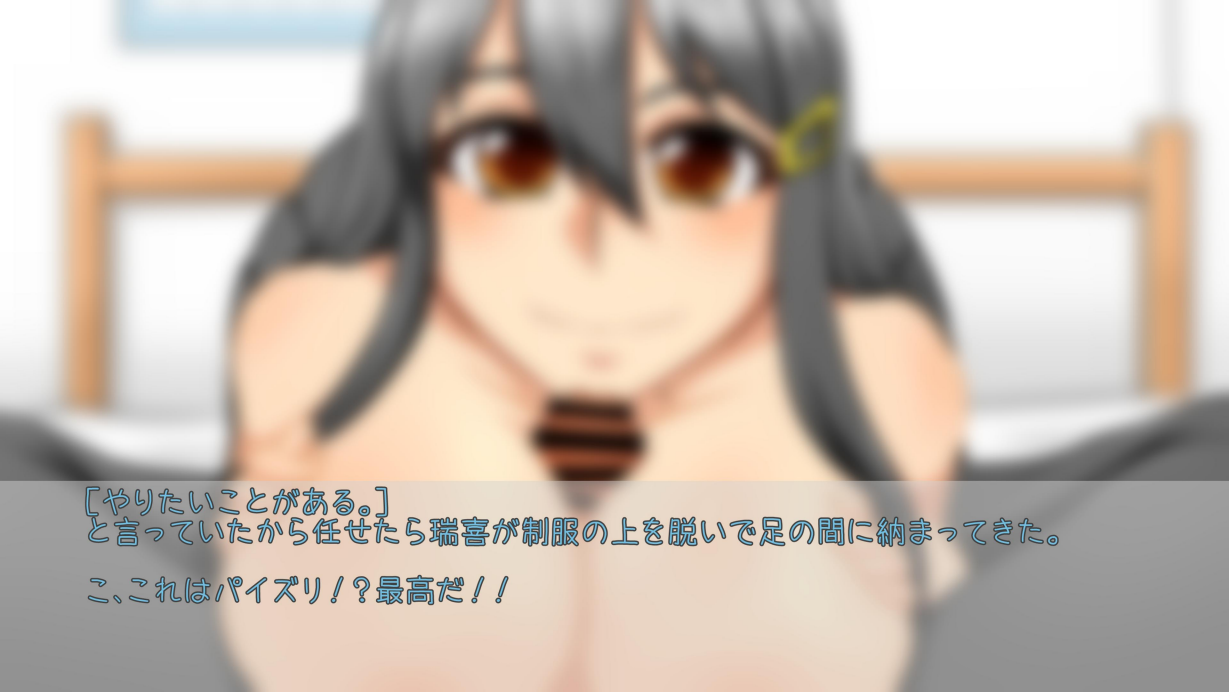
そうと決まれば早く行こう

「そうと決まれば早く行こう」  
「おう、じゃあ行くか。」

最近行ってなかったから楽しみだなー。  
あそこのケーキはどれも美味しいから、  
テストの時期はたくさん食べられて嬉しい。  
私たちは行きつけの喫茶店に向かった——



Hシーンサンプル



【やりたいことがある。】

と言っていたから任せたら瑞喜が制服の上を脱いで足の中に納まってきた。

こ、これはパイズリ!? 最高だ!!



「うおっ」

「ふふん。」

(よし、準備できた。うわー、もうガツ千ガ千。)

瑞喜のおっばいにちん〇が包まれる。大きいとは思っていたがいざ包まれてみると、  
亀頭しか出てこない。て言うか柔らかい、支えてる瑞喜の指がもう半分以上沈んでるよ。



「ふっふっ」  
(すごいしてる。やっぱりおっぱい好きなんだなあ。)  
「やはい、包まれてるだけでもめっちゃ気持ちいい。」

そう言ってもらえるのは嬉しいけど、まだまだここからが本番。  
私はちょっと慣れないけど動かし始めた。



(んしょ、柔らかくてちょっと動かしにくいな。)  
「うおっおおっやわっ気持ちいいっ」  
「ふふっ」

動かないときは心地い感じの良さだったけど、動かすとめっちゃ気持ちいい。  
自分の手とは違う柔らかい感触は最高という他なかった。



「へへっ」

(気持ちよさそう気持ちよさそう。実際どうなのかわ不安だったけど良かった。)

「ああ……まじで気持ちいい。」

正直ちょっと邪魔に思うこともあったけど、胸おっきくて良かったなあ。  
あ、そうだ忘れるところだった。確か、これもやるんだったよね。



「ん。」  
「うおっそれっ」

舌で軽く舐められたただけなのにビクッと反応してしまう。  
ぬるっとした感触が裏筋を這うのは感じたことのない気持ちよさだった。



(すごくビクッとしたけど、大丈夫かな。気持ちいいって聞いてたけど。)  
「ん？どうし……ああ、気持ちよかったから、つい反応しちゃったんだ。」  
(ああ、そうなんだ。それはよかった、男の子もビクってするんだ。)

痛かったりくすぐったかったりしたのかと思ったんだけど、ちゃんと気持ちよかったんだ。  
なんだろう、すごく嬉しい。もっと気持ち良くなってもらおう。





(えへへ、なんだか楽しくなってきた。)  
「ああ、まじで気持ちいいよ瑞喜。」  
「へへへー。」

瑞喜がめっちゃ可愛い。なんかさっきからすごく楽しそうだし、愛おしい。  
正直Hなことにノリノリなのは嬉しい。



「んっ」  
(なんかちょっとしよっほくてぬるぬるするのが出てきた。ガマン汁だっけ。)  
「ああ、瑞喜それ、ほんと気持ちいいっ」

やっぱり気持ちいいんだ、だからガマン汁が出るんだもんね。  
それになんか、ガマン汁を舐めていると体があつくHな気分になってくる。



「ん、んうっ。」  
(すごい、さっきからビクビクしっぱなし、そんなに気持ちいいんだ。)  
「あっ、そこっそれ良っ!!」

亀頭しか出ていないせいで、チロチロと裏筋ばかり責められていて  
さっきからビクビクしっぱなしだった。



「あ、ちょっと待って、瑞喜。そんなにされたらイっちゃいそう。」

「へへっ」

(イキそうと聞いて胸の動きを激しくする。はやくイクところが見てみたい。)

舌でするのはもちろん忘れずに胸の動きを早めていく。

ほらほらはやくイっちゃえ。



「ちよっイツちゃうってっくうっ!!」

「ん、んうっ」

待ってと言ったら余計に動きが早くなった。  
ああっだめだこれじゃもうっ——



「ああっ!! イックうっ!!!!」

「んうっ」

(急にピューッと精液が吹き出した。すごい勢いに思わず目を瞑る。)

急に胸の中でおち○ちんがビクッと一際大きく跳ねて勢いよく射精した。



「んっ……。」  
(や、やっと止まった……精液ってこんなに射精なの……?)  
「う、ああ……めっちゃ射精た……。」

自分でもびっくりするくらいの量と勢いの射精だった。  
パイズリ、最高だな……いや、瑞喜にしてもらったからかもしれない。






「んっんぐっ」  
(口に入った精液を飲み込む。なんだかネバついていて飲みにくいな。)  
「えっ瑞喜、飲んだの？」

味も気になって口に入った精液を飲んでみたけど……。  
うーん……美味しいとは言いがたいけど、不味くもないし……。





「え、大丈夫？そんなに不味い？」  
(うーん、分からない。いいとも悪いとも言いにくいなあ。)

一応首を横に振って否定しておく。  
なんだろう、味はともかくなんだか体が火照ってHな気分になってくる。



不味くはないようでとりあえず一安心。  
ただ、精液まみれの瑞喜が俺のを飲んでくれたことで、  
俺のちん〇はまた硬さを取り戻していた。

「なあ瑞喜、俺もっとしたいんだけど、良い？」

「ふ、ふっ」



続きは本編で！！